



# アイデンティティの形成と教育学研究 : 女性の自立と人間らしく生きること

小池, 由美子

---

**(Citation)**

大学評価学会第16回全国大会 シンポジウム「研究・生活とともにある大学評価 : 研究者の『多様な育ち』を支える大学のあり方を探る」, 公開企画2:1-4

**(Issue Date)**

2019-03-02

**(Resource Type)**

conference object

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005673>



シンポジウム 「研究・生活とともにある大学評価

—研究者の『多様な育ち』を支える大学のあり方を探る—

「アイデンティティの形成と教育学研究

— 女性の自立と人間らしく生きること —

埼玉県立川口北高等学校

大東文化大学非常勤講師

小池 由美子

1. はじめに

(1) 研究者とは何か

公開研究会②の司会者によると、「研究者」を満たす条件は次の3つを提示している。

○研究をしている

- ・研究職で生計を立てているかどうかではない
- ・研究機関に所属しているかどうかでもない

○学会・研究会等に参加して研究交流を行っている

○研究的な文章を執筆する

- ・発表媒体や頻度はとりあえず不問

上記を前提にすると、筆者は一応「研究者」の条件をクリアしていることにはなる。

また、この公開企画の趣旨が、「学問・研究を通じて市民社会を支え、市民社会から支えられる大学は、多様なあり方で研究を続けていく人々とともにある必要があります。本シンポジウムは、それぞれの生活（仕事や家族の世話など）を営みながら研究を続けている方々（傍線は筆者）と、またそのような研究をサポートする仕事の経験を持つ報告者の報告をもとに、「研究・生活とともにある大学評価」には何が求められるのかを考えていきたいと思います。」とあり、傍線部に着目すれば筆者は多様な研究者の「事例」そのものであると考えられる。

そこで報告するに当たり改めて広辞苑を調べると、「研究者」の項目は存在しなかった。「研究」の項目は「よく調べ考えて真理をきわめること」とあるので、それに「者」を付けると「研究者」になる。従って、一般的には「研究者」になるための資格はないと言えるのかもしれない。自分でテーマを決めてよく調べ、考えて真理を究めれば研究者であると言っても差し支えはないということになるだろうか。この公開企画の「研究者」の趣旨は広い視点でとらえられており、権威に縛られない「開かれた研究者」という概念が適切なものかもしれない。

そうした視点から多様な経路を経て、かろうじて「研究者」の末席を汚す事例として報告することをお赦しいただきたい。しかし、職業として自立した「研究者」とは言えない点において躊躇があることも、あらかじめお断りしておきたい。それは、女性の自立を考える視点と同じである。女性の自立を何を以て図るかという目安の一つに、経済的自立が

ある。収入の多寡は別にして、経済的に依存しては自立した研究は困難を伴うからである。

## (2) 多様性のあり方と女性研究者

多様性のあり方としての女性研究者を考える際に、先駆けとして動物生態学者の中村方子先生を挙げておきたい。1930（昭和5）年に生まれ、ミミズに魅せられて半世紀研究を続けられ、東京都立大、中央大学で奉職された。戦後日本においてまだ女性研究者がほとんどいない中、出産後の産後休暇もなく復職し、子育てしながら研究職を続けた方である。男性社会であった大学で働き続けるために、女性の権利がいかに大切か、全国の大学の教職員組合の婦人部長としても活躍されたことは、『ミミズに魅せられて半世紀』<sup>1</sup>に詳しい。筆者が2006年に大学院で学んだ時には、セクシャルハラスメント、パワーハラスメント、アカデミックハラスメントについて大学からきちんと説明があった。パンフレットには相談機関も明記されていたことに、研究機関における多様性が保障されていることを知り、感動を覚えたことは記憶に鮮明に蘇る。中村先生が研究された約50年間と、2019年の現時点を比較した時に、何処まで多様性が認められるようになったのか、そのための権利が何処まで保障されるようになったのか、改善すべき課題（建て前と本音のズレ）は何かを検証することは、大学評価学会として意義があると思う。

## 2. 筆者のアイデンティティの形成

### (1) 生育歴

太平洋戦争の最中に育った筆者の母は、青春と学ぶこと全てを戦争に奪われた。「私たちが一番勉強しない口」とは母の口癖であった。学びたい盛りにそれを奪われた悔しさが、物心ついたばかりの筆者にも感じられた。茨木のり子の詩『わたしが一番きれいだったとき』そのものである。「伯父さんは沖縄戦の生き残りだったんだよ」と繰り返し聞かされた記憶は、筆者に戦争は決してしてはならないことと、平和の尊さを深く刻みつけた。また、「隣のお姉さんは凄いな。女弁護士さんだよ」という言葉からは、女性が自立することを当然のことと考える自我を育ててくれた。ナラティブに自分を語る母は、娘に何かを教育しようとか、特定の考え方を押しつけようとしたのではなく、自分の内奥から自然に溢れて出てくるものを言葉にただけなのであるが、筆者のアイデンティティの形成には大きな影響を与えた。それをはっきりと自覚したのは、6年前に在宅看護で母を看取ってからである。

また従姉妹の存在も、筆者のアイデンティティの形成に影響を与えた。「くだらない漫画ばかり読んでいないで、これを読みなさい」と中学生の時に勧められたのは、モーパッサンの『脂肪の塊』である。中学生が読むにはいささか早熟すぎると思うが、「従姉妹はこの小説から私に何を考えさせたいのか?」、は真剣に考えた。従姉妹は社会学に目覚め、ポーボワールの『第二の性』とサルトルを中学生の筆者に熱く語り、「将来、掃除婦になっても良いから、今は学びたい」とドイツに3年間（3年目はベルリンの壁が崩壊した時であった）留学した姿は強烈であった。従姉妹は、その後から現在に至るまで私大で社会学の研究と学生の教育に携わっている。

## (2) 女性としての自立

こうした生育歴の中で筆者の中に育った職業観は、

- 女性として自立できる職業に就くこと
- 男女平等で、結婚後も続けられる職業であること
- 社会に貢献できる職業であること

であった。短絡的な発想ではあるが、この3条件を満たす職業として、「隣のお姉さん」に憧れ、小学校の高学年から既に弁護士になろうと考えるようになっていた。

しかし、世の中は思う通りにならないのが常である。高校卒業後、1年間の猶予を余儀なくされた。その時に、ジャーナリストであった予備校の英語の講師に出会い、「ホロコースト」の実態を知り衝撃を受けた。『アンネの日記』は読んでおり、ナチスによるユダヤ人の大量虐殺についてそれなりに知ってはいたが、ドキュメンタリーの映像に圧倒されたのである。歴史の真実を伝え、歴史をつくる市民を育成することが自分の目指す道ではないか、と考えるようになった。そこで初めて高校の教師を目指すことになった。

## (3) 高校教師になって

高校教師になると同時に、結婚し出産も続いた。20代は教師として甚だ未熟であったが、日の丸・君が代問題や、生徒の進級・卒業を巡って深夜に及ぶ職員会議を経験したことは、自分の教師としてのアイデンティティを形づくった。先輩先生の意見を聞き、生徒の多様性や、成長・発達とは何か、生徒に表れる問題は社会の縮図ではないかと考えさせられた。教師とは何か、学校とは何か、教育とは何か、自分に突きつけられた。生徒の抱える問題は実社会の反映であることを学び、教育観が鍛えられた。

## (4) 仕事と子育ての両立

産休や育休を経て、子育てと仕事を両立するに当たっては、先輩の女性の先生の暖かい言葉に支えられた。「今はできなくても良いのよ。できるようになった時にやってくれば良いのよ。」という言葉に、どんなにほっとしたことか。「公務員だから女性の権利が確立しているけど、これを民間に広げて行かなくては」と語った独身の先生は凄いと思った。また、組合があったので管理職のパワーハラスメントからも守られ、安心して働くことができた。「権利は行使しなければ権利でなくなる」ということ、女性の権利は先達の不断の努力があって実現したものであることを、身を以て感じた。獲得できた権利は現状維持では後退しかねず、拡大してこそ次世代の女性の地位が向上していくことも実感した。筆者が育休制度を取った頃より、現在は格段に制度が拡充し、育児休業や子どもの看護休暇、家族休暇、介護休暇等が充実してきていることを嬉しく思う。自分の子どもたちの世代が、少しでも働きやすくなることを願っている。

職場とは別の所で、一市民としては保育運動、学童運動に関わり、学校と全く違う世界を知ったことも、教師としての仕事に還元された。子どもの成長・発達を0才児から見ることができ、子どもの多様性を理解できたことは、保護者の気持ち、生徒の心に寄り添える教師に近づけてくれたと感じる。また保育や学童運動などで、居住する市の行政や議会に働きかけた。子育てしやすい街づくりを市民である自分たちの手で担ったことは、主権者とはこういうことなんだ、と実感できた。

### 3. 教育学研究との出会い

言い訳になってしまうが筆者の大学時代の教職課程はマスプロ授業で、教育学について深めて理解する所までは行かないまま卒業してしまった。恥ずかしいことではあるが、高校教師としては、国語の授業がきちんとできれば一人前になれると思っていたのである。

しかし、教師になって様々な教育研究会に参加し、先にも述べたように少しずつ視野が広がり、「教育」について考えるようになった。

2003年に、当時の勤務校が学校自己評価システムの研究指定校になった。その時、研究者と学校評価について、一からシステムをどう構築するか共同研究するようになった。そこで初めて実践研究とは異なる、学問としての「教育学」を意識するようになったのだ。その経過で「社会人が学べるコースができたから」と強く勧められ、大学を卒業してから実に四半世紀近く経ってから、大学院に入学したのである。教師として実践報告するのは違う、「研究」の入り口にやっと立った、ということであろうか。そういう意味では、最初から研究者を目指していたのとは全く異なる「多様性」があるといえる。非常に回り道をした。しかし、修士課程に入学しても、修士論文で実践と理論を統合することが目標<sup>2</sup>であって、職業としての研究者を目指していたわけでもない。アイデンティティは、あくまで高校の教師だった。修士課程を修了してから、「今までやってきたことは不十分であった。さらに理論を深めたい」とやっと思うようになり、自分の意志で様々な学会に加入し、ようやく自覚的に研究するに至ったのである。

#### おわりに

今年度から、大学の教職課程で非常勤講師として「教師論」、「教育法・行政」を担当するようになった。テキストは一から自分で研究する面白さを感じている。大学3年生を相手にすぐになじむことができたのは、やはり高校教師を30有余年勤めてきたからだとも感じている。成長・発達のプロセスは連続しているのだ。アクティブ・ラーニングは、そもそも大学から導入されたものであったが、高校で取り組んできたアクティブ・ラーニングを応用すると、大学生は主体的・対話的に学んでくれた。講義をして感じることは、学生は大学全体の教員が関わって育つということである。教育について語っていると、「あっ、先生！ それ、道徳教育でも言われたので、つながります」「教科教育でも同じことを言われました」、と学んだことが響き合っていくのである。学生が知識と知識を結びつけ、自分の理解を深めて納得して行くプロセスが感じられる。それは学生の顔に自信になって表れ、教職を目指す意志と喜びがにじみ出てくる。

現実の学校には、矢継ぎ早の教育改革で課題は山積している。実践と理論を統合して人間らしく生きられる教育を取り戻し、オルタナティブを発信できるように、自己研鑽に努めていきたい。

---

\*1 『ミミズに魅せられて半世紀』 中村方子著 新日本出版 2001年

\*2 修士論文をリライトした拙著 『学校評価と四者協議会 一草加東高校の開かれた学校づくり』 同時代社 2011年